

年頭に寄せて 一我以外皆我諸仏一

一水のはじける音一

まるで夢のような朝だった
必要ないものはすべて
存在しなかった

私はただ
自分の存在と共にあり
あらゆるものが
美しく光り輝いていた

世界が変わったのではない
ふと私が変わったのである

ただそれだけのこと
何の理由もいない
私が変わるということ

この詩は産経新聞「朝の詩」に掲載されたもので、作者は二十五歳の女性です。

彼女は、ある朝突然、周りの様子が一変している光景に出会い、驚きます。
昨日まで当たり前のように眺めていたはずの同じ光景が、今、光り輝き、何一つ不要なものがないというものでした。
何故そのようなことが起ったのかというと、彼女は「自分が変わったからだ」と言っています。

果たして「自分が変わる」とは、どのように変わることでしょうか、ここで私たちの日暮らしを通して考えて見たいと思います。

私たちは、さまざまな人間関係の中で日暮らしをしています、よく周りの人と衝突（揉め事）します。
衝突は、「自分は正しい、相手が間違っている」ということから起こります。
ですから、一度衝突しますと、相手が折れない限り解決しません。
ところが、よく考えて見ますと、相手も同じ様に「間違っているのは相手の方だ」と思っていますから、もちろん自分の方から謝ったりはしません。

かくして、その揉め事は延々と続くことになるのです。

しかし、衝突しっぱなしではいつまでもシコリが残ります。そこで、よく次のような謝り方をします。

「そりゃー、ワシも悪かったかも知れんが、しかしあんたも、もうちょっと考えてもらわにゃ・・・」

私たちの謝り方はこの程度なのです。

「自分も悪いが相手も・・・」、こんな謝り方では、本当に自分が悪かったなどとは、思っていないのです。

それが証拠に、そんな謝り方をして、相手が「やっぱり、あんたの方が悪かったじゃないか」と言われたらどうですか、途端に「何を！生意気なことを言うな」ということになるはずです。

ことほど、私たちは、「自分は正しい。間違っておらん」という思い（我執）を、捨てることが出来ないのです。

まことに愚かでありながら愚かであることに気づかない、それどころか賢いとさえ思っている、それが私たちなのです。まさに「頭の下がらない」日暮らしを続けているのです。

そんな私が、「自分を変える」にはどうすればいいのでしょうか。

それは、「その生き方は間違っていますよ」と、教えてくれるものに出遭う以外ありません。

親鸞聖人は、「それを教えて下さるお方が阿弥陀さまですよ」と、お示し下さいました。

愚かな者こそ救わずにはおれない・・・この阿弥陀さまの大悲と呼ばれるお心に出遭えば、間違いなく愚かな自分が見えてきます。見えれば当然「愚かな私です」と頭が下がります。その頭が下がった時、「自分が変わった」と言うのです。

「自分が変わる」というのは、何も賢くなったり、立派な人間になることではないのです。ただただ、愚かな自分に目覚め、「頭が下がる人間になる」ということなのです。

つまり、「頭が下がらない生き方」から「頭が下がる生き方」に転じられることを言うのです。

こうしてひとたび頭が下がれば、周りの世界が一変するのです。

藤田徹文先生は、

お念仏のみ教えに出遭って、ものの見方が正されてくる時、私の周りには、何と多くの仏さまがおって 下さったことよと、驚かずにはおれませんか
と仰っていますが、まさにこのことを語っているのです。

「自分の生き方は間違っておらん」と自惚れ、頭が下がらなかった時には、決して見えなかった世界です。

周りが変わったのではないのです。こちらが変わることによって、周りが全く違って見えてくるのです。

冒頭の詩の作者が「世界が変わったのではない、私が変わったのである」と言っていますが、やはり同じようなプロセスを踏んだのだと思います。

私たちにとって、「自分を変える」ということは本当に難しいことではありますが、この一年、お念仏という確かな教えを拠り所にしながら、いかなることに出くわしても「自分を変える」努力を惜しまないようにしていきたいものです。

そうすれば、いつの日かきっと、私の周りにある、ありとあらゆるものが光り輝き、何もかもが私にとってなくてはならない、そんな素晴らしい世界が実現すると思います。

その時、「この世界は、我以外皆我諸仏（私の周りは、みんな私を導き育てて下さる仏さまである）だったんだな」と、深い感動に包まれた人生が開かれてくるのです。

平成18年2月 「光明寺だより44号」より